太陽の子

２０２４年　１月　№.１８６

冬　の　号
発　行
日立市助川町５－１４－８
TEL(23)2620　FAX(33)9150
ホームページ　http://www.taiyonoie.com
Eメール　npo@taiyonoie.com
ＮＰＯ法人 日立太陽の家
日立重症心身障害児(者)を守る会
日立太陽の家支える会

電車に乗って茨城キリスト教大学に遠足に行ってきました。駅では、自動改札機に自分で切符を通し、初めての体験をたくさんしました。大学内での散策や、学食でのランチと楽しい時間を過ごしました。みんなニコニコ笑顔でいっぱいでした。　（母子療育ホーム）。

愛する息子

母子療育ホーム　児童発達支援管理責任者　堀　江　浩　子

私事ではありますが、昨年6月に男の子を出産しました。妊娠中から逆子で、帝王切開での出産でした。術後は高熱と強い痛みに襲われ、喜びもつかの間、これまで経験のない辛い一夜を過ごしました。そんな痛みと闘うなかで、医師から腎臓に尿が溜まる病気があると説明を受けました。妊娠中からそれとなく言われていたものの、現実を突きつけられたようで、頭が真っ白になり、涙があふれていました。医師から丁寧な説明がありましたが、何も手に付かず、ただ涙がぽろりぽろりと落ちていきました。時間が経つにつれて、自分で調べることや、周囲の人に相談したりすることで、自分の気持ちと向き合う時間ができました。そして、日々成長していく息子が愛おしく、病気に勝るものがあると感じるようにもなりました。

まだまだ心配事はつきませんが、毎日を笑顔で過ごしている息子を見ていると、それだけで良いと思っていますが、もっともっとと求めてしまう私もいます。子育ては、想像とは違い、決して穏やかではなく、分からないことばかりです。親一年生の私はいつまでも自信が持てず、その時々を全力で生きていくことしかできません。

子育てをしながら、お仕事をさせていただくなかで、感じることがあります。子育てとは、マラソンのようだと。横を向いたら同じようにお母さんたちが走っていて、走るスピードは違いますが、同じ方向を向いて走っている。その手にはバトンが握られていて、いつの日か、このバトンを安心して渡せる日が来るまで、大事に握っている。私が「母子療育ホーム」でできることは、お母さんの持つバトンを一緒に支えて、歩くこと。そして、足を止めて休憩できる、心も休める給水所となる場所をつくっていくことだと思っています。

全国守る会ブロック大会に参加して

日立市太陽の家
内山　裕加里

今回、全国重症心身障害児（者）を守る会第33回関東・甲信越ブロック大会に初めて参加させて頂きました。参加させて頂くことで、これまでの「全国重症心身障害児（者）を守る会」の歩みや活動の歴史について知ることができました。そして、今回のテーマが〈希望に向かって共に生きる社会をめざして〉という内容でした。私が特に印象に残っているのがシンポジウム「コロナ禍における日中活動支援（個別支援）の現状とこれからの課題」の中のシンポジストの方々の発表でした。昨今の各施設の共通課題だと思われるコロナ禍における日中活動支援（個別支援）という議題でしたが、シンポジストの方々の内容で新たな発見がありました。越谷特別支援学校では、外部交流が減ってしまった中でもＩＣＴを使って校内の行事を行なっていました。私はＩＣＴとは授業の中でのみの活用と思っていましたが、越谷特別支援学校 ではＩＣＴを使ってｚｏｏｍなどで密にならないよう内部外部を繋ぐなど多岐に渡って活用されていました。そして、コロナ禍で活動が制限されてしまいますが〝学びを止めない〟など印象に残る言葉が多くありました。また、独立行政法人国立病院機構東埼玉病院では、コロナ禍によって減ってしまった外出の機会がｚｏｏｍを用いて現地から中継してもらうことで、実際に現地に行ったような擬似旅行ができた、というお話がありました。このようにコロナ禍だから、と日中活動を制限せずに色んなツールを使って内部外部と連携していくことで選択肢を減らさず利用者さんの主体性を尊重し、職員も個別支援を考えることに繋がると感じました。

今回、実際に現場で働く方々のお話を聞いて上記以外にも新たに学んだ情報や太陽の家でもできるかな、と思うことが多くありました。今後も利用者さんのその人らしさを大事にした支援がより良くできるよう働いていきたいと思います。貴重な学ぶ機会を提供して頂きありがとうございました。今後も至らぬ点もあるかと思いますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

太陽の家に入職してこれからの私

日立市障害者共同生活援助施設
井口　由佳

ご縁があり、太陽の家に入職して早二年が経とうとしています。入職前には、様々な障害福祉（重度心身障害・就労支援Ｂ型・放課後等デイ・児童発達支援等）に携わり、色々な経験を積ませていただきました。どのお仕事にも喜びや大変さがありましたが、気がつけば12年間も福祉の世界で頑張らせていただいています。

太陽の家に入職したからという訳ではないのですが、福祉の仕事を経験して私達が、接する利用者さんは、とても純粋（ピュア）で自分の気持ちに素直（正直）ということです。表現は、障害によって様々で、言葉で伝える方、顔の表情や身体全体で伝える方、時には暴れ、泣き叫んで表現する方等、十人十色です。すべてに理由があり、意味があるのです。その純粋さに魅せられ、私も見習わなければいけないといつも感じます。社会人になって思いを表現する事の難しさ、伝える事の大変さを実感しています。自分の苦手を棚に上げてですが、利用者さんの気持ちの代弁者・理解者として少しでも皆さんが住みやすい・生活しやすい環境づくりをお手伝いしていきたいと思います。

これからの私はぽっかぽっかの太陽の様なあったかく眩しい存在になっていきたいと思います。太陽の家では、私より年上の利用者さんが沢山いますが、太陽の（共同生活援助施設）のふくよかなお母さんのような存在になりたい……「いつも心に太陽を！」の言葉を心にとめて。

自分らしく

母子療育ホーム　理学療法士
手塚　拓也

「おはよう」と声をかけるとチラッとこちらを見て目を閉じたり、笑顔で「おはよう」と返してくれたり、自慢げに自分の服を指さし「かっこいい服着てきたんだ」と言わんばかりの表情を見せてくれたり、大人のようにしっかりと頭を下げ「おはようございます」と返してくれたり、ちょっと恥ずかしいのかおふざけで返してくれたり、様々な挨拶があふれているホームの登園時の一コマがとても私は大好きです。単純にただのあいさつではなく、そこには子供たちのそれぞれの表現が表れているからです。大人になってくると「これでなくてはダメ」や「普通はこう」とか定型文的な挨拶・行動が多くなってしまい、自分本来の表現や自分らしさが薄くなると感じています。時には定型文的な対応が必要な時もあると思います。しかし、子供たちと接し訓練を行っていると、定型文的な対応はつまらない訓練、時間になってしまうと痛感しました。私は母子療育ホームに入職し約３年が経とうとしています。入職してしばらくは今までと違うことに戸惑うことが多く、子供たちとの訓練も余裕がない時も多くありました。そんな中、子供たちとはまず一緒に遊ぶことで信頼関係ができ、そこから「この人とならいいかな」と思ってもらうことが大事と教えて頂きました。そこから少しずつ、子供たちと一緒に楽しい時間を過ごせるように様々な表現や遊びを考えるようになりました。まだまだ足りない部分が多い私ですが、最近は素敵な笑顔や言葉、訓練を頑張ってくれる姿を見せてくれるようになったのかなと、とてもうれしく思っています。もしかしたら子供たちに気を使われているのかもしれませんが。ともあれ、自分らしく、様々な表現をすることの素晴らしさを教えてくれた子供たちに感謝し、その事を大切にこれからも楽しみのある自分らしい訓練を目指していきます。

笑顔と感謝

未来へ向けて

しいの木学園保護者　八谷　明美

私事ですが去る十一月五日、息子の知元が一想園さんのグループホームでお世話になることになり、我が家から巣立って行きました。日中は今まで通りしいの木学園で御支援いただきながら、皆様に見守られて一想園としいの木の生活が始まりました。

私も八十路に入り自分自身の老いを感じるこの頃「元気なうち」「動けるうち」と思いながら、チャレンジホームでの体験も楽しくさせて戴き又、知元も私を案じて自分から家の手伝いや重い物を運んでくれたり、知元なりに成長させていただき、皆様の御支援に深く感謝しております。今は知元の生活環境も変わったばかりでお友達の名前も性格もわからず、支援員さんのお力添えを頼りに頑張っております。そしてコロナ禍のこともあり利用者さんは休日の帰宅も出来ず「お正月は帰れるのかな？」などと会話しながら、私も一緒に「帰れるといいね」と祈っているこの頃です。末筆ではありますがこれからも「焦らず、力まず、緩まず」頑張ってまいりますので宜しく御支援、お力添えをお願い致します。

「追伸」

知元が養護学校へ入学当時、スクールバスもない時代に、ある施設の先生の講演での「あせらず、力まず、緩まず」頑張って下さい。そしてお母様が心の障害者にならないで下さいと励まして下さったお言葉は、今の私にずっと思い出されるお言葉です。

出会い、感謝、繋がり

母子療育ホーム保護者　大久保　麻純

母子療育ホームで今期会長を務めさせて頂いている大久保と申します。会長とは名ばかりで、皆様の協力なしにはお受け出来なかったと思っております。

そしてこの歴史ある『太陽の子』に参加させて頂き、大変恐縮です。

次女はこちらに通い始めて間もなく幼稚園入園となり、同時にコロナ時代に突入しました。

2歳から4歳までの二年間、シャントの不具合によりいつ嘔吐するかわからない生活を送っておりました。家族で出掛ける事、お友達と遊ぶ事もままならず、極度の人見知りで家の外では言葉も殆ど有りませんでした。

しかし、登園初日からバイバイと手を降り私から離れて行った時は、ホッとしたと云うより、遠くへ行ってしまうような寂しさで私の方が泣かされました。先生方やお友達との関わりが本当に楽しかったのでしょう。毎日嬉しそうに登園していました。

小学校入学の時も勿論、長女の時のように手放しでは喜べず、心配は尽きませんでした。しかし、先生方を始め指導員の方々やお友達のおかげで、二年生になった現在も学校が大好きです。

そしていつも変わらず笑顔で迎えて下さるホームの先生方や、こちらが求める以上のアドバイスを頂ける先輩ママ達には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

この子が生まれてから、何事にも消極的になっていた私ですが、この子がいたからこそ知る世界、出会いに感謝です。

新しいママ達に、図々しくもアドバイスをさせて頂くなら、どうか、自分から世界を閉じてしまわないでほしいという事です。なぜなら子供達が世の中と繋がっていく為には、たくさんの手が、支えが必要だと思うからです。

そして繋がって行く先にはきっと、たくさんの優しい手が待っていてくれるはずです。

これまでも、これからも

櫻井　敏幸

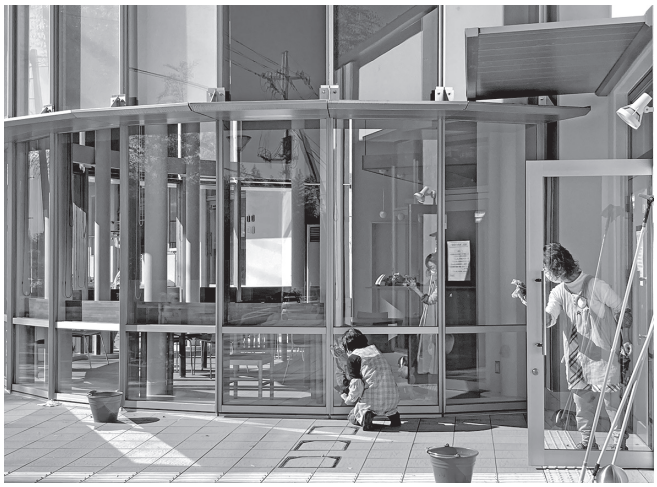
ボクは二〇〇八年四月の太陽の家の居宅介護支援事業所（居宅）の開設とほぼ同時に利用契約して以降、多方面でそのサービスの恩恵をこうむっている。最初の利用は、移動支援を使って水戸の県民文化センター（現ザ・ヒロサワシティ会館）で行われたレセプションへの参加だった。最初から土・日の利用という融通を利かしてもらえてありがたかったのを記憶している。この年の夏には、始まったばかりの生きがい支援（現あったか支援）で奈良の吉野で行われた特別歌会への参加という希望に対応してもらった。この宿泊を伴う外出への同行は移動支援のサービスの枠を超えた画期的ともいえるものだったと思う。

楽しかった奈良への珍道中の後も毎月のように、居宅の移動支援を利用して美術館やギャラリーの展示会に連れて行っていただいた。さらに居宅の身体介護を利用して入浴をサポートしていただいたりしたし、家事援助を利用して部屋の清掃をしていただいたりした。居宅の家事援助では利用していた地域活動支援センターで描きあげた絵を自宅に、自宅から絵や新たなキャンバスを運んでいただけたのも助かりました。

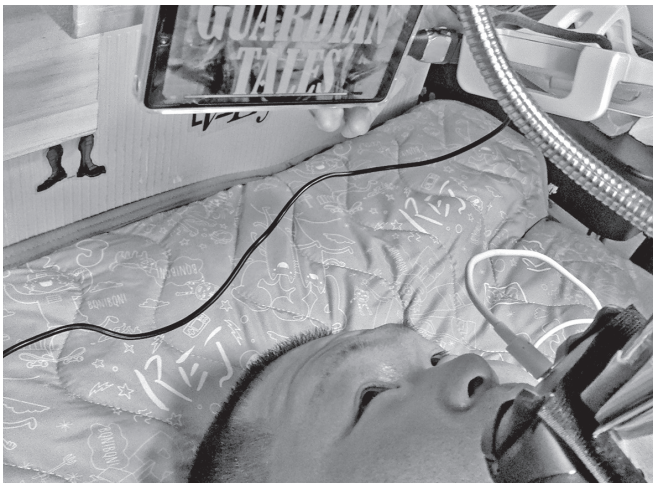
（次頁へ）

今年は４年ぶりにふれあい運動会が開催され、かけっこや玉入れなどみんなでがんばりました。（太陽の家）

ドライブの途中、太平洋をバックに「ハイポーズ」これからも少しずつ外出の機会が増えるといいですね。（ひまわり学園）



各施設の保護者さんを交えた奉仕作業が行われ建物も外観も見違えるようにきれいになりました。懇談会も含め有意義な時間でした。



ベッドの上、視線の先にはスマホの画面、手作りの装置を使い手や足の指先、顎を使ってコントロール。このひとときが至福の時間です。（日立太陽の家居宅介護事業所）

※写真撮影時のみマスクをはずしています

（前頁より）

定期的に通院している障害者歯科の受診も居宅の通院等介助で自宅と歯科の送迎をしていただけているし、歯科だけでなく他の病院へも受診することができている。

二〇一五年からは「相談員をつけては」という市役所の障害福祉課の勧めもあって相談支援事業所（相談）のサービスも利用するようになった。役所への各種申請手続きの代行をはじめ困ったときに相談員さんに連絡を取ると迅速かつ丁寧に対応してもらえるので大変お世話になっています。一想園での生活介護（入浴・食事）リハビリの利用ができるようになったのも相談員さんのおかげです。

父が他界し母の負担が大きくなったので、利用できるサービスは利用していこうと思っています。太陽の家の居宅や相談のサービスはその中核を成すものだと考えます。今後ともよろしくお願いします。

お知らせ

◎二〇二三年度
ＮＰＯ法人日立太陽の家
利用者総数　三百八十三名
男性　二百二十五名
女性　百五十八名

ご寄付ありがとうございました

○次の方から寄付を頂きました（敬称略）　九月～十一月
黒澤弘明　前田勝子
とく名　人形劇かくれんぼ
○次の方から物品の寄贈がありました（敬称略）　九月～十一月
椎名将光　篠原小百合
前田勝子　沢幡栄
大森健二

編集後記

「笑顔と感謝」
あなたの笑顔がそこにあるから今年もたくさん笑って、たくさん楽しんで、一緒にあったかな一年を過ごしたいと思います。

（K記）